

コメディ・タッチに描かれたラフマニノフの生涯

ルツェルン音楽祭 (OSTERN) / メンデルスゾーン祭

3月31日～4月2日 ●スイス ルツェルン・カルチャー・コンGRESセンター

取材・文＝中 東生

ルツェルン音楽祭「メンデルスゾーン祭」が3月31日～4月2日にKKL (ルツェルン・カルチャー・コンGRESセンター) で開催された。祝祭管弦楽団の首席指揮者リッカルド・シャイーは、自身が長年音楽監督を務めたライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の遠い「前任者」であるメンデルスゾーンの作品を振りたかったはずだが、1週間前に病欠が発表された。

1日目に代役を務めたイヴァン・フィッシャーは、シューベルト《イタリア風序曲第2番》を輝かしく仕上げた。ラファウ・ブレハッチ (p) を招いたショパン「ピアノ協奏曲第2番」第1楽章では、流れるオーケストラと刻むピアノがギクシャクしてしまったところもあったが、弱音では品のよい小ぶりのピアノに、オーケストラが美しく寄り添い、第2楽章では格別に匂い立った。ブレハッチは「ピアノの詩人」ショパンしながら、歌うのではなく、詩を朗読するように、言葉を噛みしめて語るのだ。後半はメンデルスゾーン「交響曲第1番」にメスエットとスケルツォの両方を挿入し、妖精楽団さながら軽やかに演奏した。

翌4月1日はラフマニノフの150歳の誕生日に際し、「イグデスマン&ジョー」がラフマニノフの誕生会を銘打った。超絶技巧も操るコメディアン・ミュージシャンの二人は、ラフマニノフ作品が得意レパートリーの一つだという。今回のゲストは、ユジャ・ワン (p)。YouTubeにも3人によるパフォーマンスの動画がアップされているが、いくらバカなことをしても、各々の楽器が美しく鳴るから本物感がある。そして、ラフマニノフの人生を語りながら進むショーには興味尽きず、子供たちにも聞かせたい極上の伝記物語に仕上がっている。また、ユジャ・ワンのエンタテイナー性にも心底驚いた。出過ぎず、協調生もあり、自然体で笑いを取る。タブーも物ともせず、たとえば、ラフマニノフの手が特大



クラシック音楽をパロディにしたコメディ・ショーで有名な「イグデスマン&ジョー」とユジャ・ワンの共演。アニヴァーサリーを迎えたラフマニノフの人生をユーモアたっぷりの伝記物語に仕上げた
©priskaketterer_lucernefestival

だというエピソードの際、弾くべき鍵盤すべてに突起が付いた棒でピアノを叩き弾いたり、連弾で身体にタッチされるギャグも清潔な色気でもかわしたりする。超ハイヒールでも踊る体当たりのショーに、最後は会場中が携帯電話のライトを左右に振って盛り上がった。

4月2日はアンドレス・オロスコ＝エストラーダが代わりに振ったが、パブロ・フェランデス (vc) がソロを弾くシューマン「チェロ協奏曲」も、レグラ・ミューレマン (S)、シモーナ・シャトゥロヴァー (S)、アラン・クレイトン (T) の3人が美しく歌い上げたメンデルスゾーン「交響曲第2番《讃歌》」も、若い情熱を迸らせた。シャイーの早期回復を祈るが、不在を惜みずに済む3日間となった。



シャイーの代役で指揮を執ったI. フィッシャーはブレハッチと共演
©priskaketterer_lucernefestival



若き名手フェランデスも登場。指揮はオロスコ＝エストラーダ
©priskaketterer_lucernefestival